



札幌西支部

岡崎 正毅

Masataka Okazaki

夏の甲子園・第100回大会。優勝は、2度目の春夏連覇・大阪桐蔭高校に輝いた。またもや深紅の大優勝旗は、白河の関を越えることができず、誠に残念だ。公立で全員県内出身者の「雑草軍団」秋田・

金足農業高校は善戦したが、やはり才能あふれるドラフト候補が揃う「エリート軍団」には及ばなかった。大変盛り上がってただけに、無念、無念。

今年は第100回という記念大会で、甲子園には多くのレジェンドが登場した。またテレビや雑誌でも、1世紀以上の歴史から、数々のヒーローやエピソードを紹介する特集を組んでいた。甲子園は、日本人の「ふるさと」なのかもしれない。これからも「聖地・甲子園」の物語は、様々なドラマを繰り広げながら、新しい歴史を刻みつつ、私たち日本人の胸の中で輝き続けることだろう。

思えば夏の甲子園との出会いは、第51回大会（69年・S44年）、三沢高vs松山商の史上初の延長18回の決勝戦だった。小学校のプール学習に行く時に試合が始まり、終えて帰宅しても試合が続いており、思わずテレビに見入った。その時、戦前の中京商vs明石中の延長25回の試合は、9回を終わって0-0のまま延長となり、3連覇がかかっていた中京商を応援するために、名古屋を出た人が試合に間に合ったというエピソードを聞いた。初めて甲子園の物語に触れた瞬間だ。

第59回大会（77年・S52年）は、愛知・東邦高の1年生・バンビ坂本投手。惜しくも決勝の延長10回でホームランを打たれた悲劇性に、大フィーバーが起こった。でも最も凄かった熱狂ぶりは、早実の荒木大輔だろ

う。80年（S55年）の第62回大会、甲子園にアイドルが降臨し、空前の「大ちゃんフィーバー」が巻き起こり、もはや社会現象となった。

その荒木を倒したのが、第64回大会（82年・S57年）、「攻めダルマ」こと蔦監督の池田高校「やまびこ打線」である。準々決勝で早実を14-2で撃破し、決勝では高校野球のお手本とされた広島商も12-2と蹴散らす攻撃力は、本当に凄まじい破壊力だった。堅守で相手の攻撃をしのぎ、機動力と小技を生かした緻密な攻撃で得点を重ねるのが、伝統強豪校の野球。それこそが「ザ・甲子園」。ところが池田高の攻撃陣は、いくら金属バットだといえども、カキン、カキンと連打で畳み掛け一気に試合をひっくり返してしまう。右、左に飛ぶ打球に翻弄される野手の姿にびっくりした。甲子園の野球が変わった瞬間だった。

この常勝・池田高校を破ったのが、PL学園の桑田・清原の「KKコンビ」だ。「甲子園は清原のためにあるのか」といわれたように、二人は数々の金字塔を打ち立てる。正に「KKコンビ」は、甲子園史上最強の打者と投手といえるだろう。

第74回大会（92年・H4年）は、石川・星稜高のゴジラ松井への5打席連続敬遠。試合途中から場内は騒然となり、明德義塾が勝利した後も騒ぎは収まらず、連日マスコミで取り上げられ、高校野球における「勝利至上主義」について、日本中で議論が沸き起こった。星稜高校といえば、第61回大会（79年・S54年）の和歌山・箕島高との延長18回の死闘が、とても印象に残る。たまたま大学のゼミの同級生が、この試合を甲子園スタンドで観戦しており、後日、試合経過や甲子園球場の様子などを興奮覚めやらぬままに熱く語っていたことを思い出す。

甲子園を沸かした「平成の怪物」といえ

ば、横浜高の松坂大輔だ。98年（H10年）、3年生となった松坂は、春センバツ（第70回大会）で優勝し、夏の第80回大会では、準々決勝でPL学園と延長17回まで一人で250球も投げ切り完投勝利。翌日の準決勝・明德義塾戦では、8回までに0-6で負けていたところ、9回1イニングを松坂が投げ、奇跡の逆転勝利を呼び込んだ。そして決勝戦では、京都成章高を相手にノーヒットノーランを達成。実に59年ぶり甲子園史上2人目の快挙だった。この年、甲子園で春夏連覇を果たし、さらに神宮大会と国体にも優勝し、4冠の達成と公式戦44戦無敗という、いまだ破られない記録を作り出している。横浜高校は無敵艦隊と称された。

そして、駒大苫小牧高校の登場だ。第86回大会（04年・H12年）、2年連続4度目の出場で初優勝を飾る。北海道はおろか東北地方以北で春夏の甲子園を通じて初の優勝で、深紅の大優勝旗は、一気に津軽海峡を越え、北の大地に届いたのだった。北海道中が大興奮に包まれ、沸き返った。チーム打率の.448は大会記録だ。優勝した瞬間、ナ

インがマウンドに集まり、人差し指を天空に突出し、1番をアピールしながら喜びを分かち合う姿が印象深い。佐々木主将の「北海道をなめるなよ」の心意気には胸がすいた。

翌年・第87回大会では、見事に2連覇の大偉業を達成。夏の甲子園史上、57年ぶり6校目の快挙である。さらに、戦前の中京商以来の夏3連覇に挑んだ、第88回大会（06年・H14年）も決勝に勝ち進んだ。田中マー君とハンカチ王子の投げ合いは、延長15回までに決着がつかず、あの第51回大会の三沢高vs松山商以来37年ぶりの決勝再試合となったのである。再試合の9回表、最後の打者となった、マー君の空振り三振と笑顔が忘れられない。惜しくも夏3連覇は達成できなかったが、彼らの健闘は、間違いなく道民に勇気を与えた。

高校野球は「好投手あるところに栄冠あり」といわれる。今年の第100回大会も、金足農業高校の吉田輝星投手らの超人的な活躍が光った。幾多のドラマを繰り広げる、夏の甲子園。来年も、また新たなヒーローが生まれるに違いない。

